

平成28年度事業計画

自然再生や生物多様性の回復など湿地保全の重要性が世界的に認識されている中、ラムサール条約湿地である伊豆沼・内沼の自然環境の保全とその活用については、財団を中心にこれまで多種・多様な活動が展開されてきております。また、研究と保全、普及啓発を一体とした財団の総合力は県内のみならず、全国的に注目されており、伊豆沼・内沼の保全活動において財団の果たすべき役割は今後益々重要となってまいります。そのようなことから、新年度においては、無人航空機（ドローン）などのリモートセンシング技術を活用した省力的かつ効率的な植物管理や生物監視システムの構築に向けた新たな事業に取り組むなど、湿地保全のフロントランナーとして活動を進めてまいります。

自然再生事業では、植生管理技術の更なる向上を図り、より効率的かつ確度の高い、クロモ群落の復元やハスの大規模刈り取りの実施に取り組んでまいります。また、マコモ群落の残存率向上の試験研究を継続し、湖岸植生の回復に向けた取り組みを行います。

外来魚防除活動では、外来魚の生活史全体にわたって成長段階に応じた効果的な防除事業を行う伊豆沼方式を継続し、外来魚をさらに抑制するための技術開発を進めます。また、これらの事業に加え、新たに外来水生植物の除去や二枚貝類の増殖・移植事業を行い、さらにトヨタ自動車（株）の助成金を活用したトンボ保全プロジェクト事業を実施することで、在来生物の復元を図り、沼の生物多様性の回復に努めます。

自然保護思想の普及啓発活動では、より充実した展示内容にリニューアルされた新生サンクチュアリセンターを有効活用するほか、伊豆沼・内沼研究集会や研究報告の発刊を通じて、学術的知見を広く情報発信し周知します。また、自然体験講座や出前講座、写真展などを開催するほか、講話要請や団体視察などにも積極的に対応し、みやぎラムサールトライアングル関連事業とあわせて、環境教育の場の拡充を図り、伊豆沼・内沼の自然保護と賢明な利用への意識向上に努めます。そのほか、沼をフィールドとする各種研究機関への支援を行います。

施設の管理運営では、宮城県伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター及び栗原市サンクチュアリセンターつきだて館について、指定管理者として良好な施設環境を維持しつつ、両施設の連携も図りながら自然保護思想の普及啓発活動の場として有効活用してまいります。

I 宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団の運営

1 評議員会及び理事会の開催

定款の定めにより、評議員会は定時評議員会として事業年度終了後3箇月以内（5月又は6月）に1回開催するほか、必要がある場合は臨時評議員会を開催する。

また、理事会は定時理事会として事業年度終了後3箇月以内（5月）及び翌事業年度開始前（3月）の2回開催するほか、理事長が必要と認める場合などに、臨時理事会を開催する。

なお、臨時理事会の開催が困難な場合は、定款の定めるところにより決議の省略による決議をその都度必要な手続きを経て行う。

2 事務局担当課長会議の開催

宮城県環境生活部自然保護課、登米市（環境課、商工観光課）、栗原市（環境課、田園観光課）及び当財団で構成する「事務局担当課長会議」を理事会前に開催し、理事会提案事項や事業執行上の諸課題について協議・検討を行う。

3 資産の運用管理

日銀の金融政策などにより国債等の債券や預金の金利は低下の一途をたどっており、基本財産の運用においては厳しい状況となっている。一方、公益法人としての財団には、より一層公益性の高い自主事業の展開が求められており、それに必要な運用果実の確保が重要となっている。そのようなことから、基本財産については、安全・確実かつ高金利の金融商品による運用を図る。

4 財団運営寄付金及び自然保護基金造成のため要請等

当財団の財政基盤は脆弱な状況が続いており、宮城県、登米市及び栗原市による財政的支援等により、これまで厳しい状況を克服してきた。自然保護基金及び財団運営寄付金については、財団運営の根幹をなすものであることから、ホームページ等を活用しながら支援等の要請を行う。

5 民間団体助成金の活用

民間企業による自然環境への問題意識や関心が年々高まってきており、各種の助成制度を設けて、地域で活動している自然保護団体等への支援を行っているが、当財団としても財政基盤の確立を図るため、民間企業における助成事業や調査・研究事業等の獲得に向けて積極的に取り組む。

6 国、県及び市との連携

国、県などからの受託事業等については、委託者である国、県はもとより、登米・栗原両市とも連携を図りながら効率的かつ確実に事業を実施する。

7 情報の発信

ホームページやセンターニュースのほか、各種広報紙及びマスコミ等を効果的に活用し、最新の情報発信に努める。

II 宮城県伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター管理運営事業

平成26年度に指定管理者として新たに5年間の指定を受けて3年目の年となるが、引き続き良好な施設環境を維持しつつ、経費の節減等も図りながら、安全かつ効率的な施設の運営管理に努める。

また、平成27年度にリニューアルされ、より充実した展示内容となった新生サンクチュアリセンターについて、広く県内外に周知し入館者の拡大を図るほか、栗原市サンクチュアリセンターつきだて館を始め、他の施設との連携も図りながら、環境教育の場として有効活用する。さらに、伊豆沼・内沼周辺に設置されている3館の集中管理も視野に入れながら、指定管理者となっていない登米市サンクチュアリセンターの指定管理に向けて、

登米市と必要な協議を行う。

このほか、周辺の環境整備として、水生植物園やハス田・買上地の管理、観察路の整備等を実施する。

1 水生植物園の管理

水位の適正管理に努め、自然再生事業で再発見し、系統保存を続けているジュンサイなどの貴重な野生動植物の増殖を図る。また、園内に設置されている施設を注視しながら適宜観察路の修繕を行うなど利用者の安全確保に努める。

2 ハス田管理（1 ha）

水位等ハス田の適正管理に努め、健全なハス群落の保全維持を行う。

3 買上地等の保全管理

年2回の除草作業を基本とするほか、環境整備の一環として、ヤナギなどの立木の枝打ち・伐採を適宜実施する。また、植生の保全管理やゴミの撤去など、沼周辺の自然環境を保全する上で効果が大きい野火を伊豆沼漁業協同組合及び土地改良区等と連携し実施する。

4 地域内巡回指導

ゴミの不法投棄を防止するため、沼周辺の巡視を強化する。また、ブラックバスの釣人に対しては、県内水面漁業調整規則及び内水面漁場管理委員会の指示に基づき、適切な指導を行う。

Ⅲ 栗原市サンクチュアリセンターつきだて館管理運営事業

県サンクチュアリセンターと同様に、新たな5年間の指定管理者の指定を受けて3年目の年となるが、引き続き良好な施設環境を維持しつつ、経費の節減等も図りながら、安全かつ効率的な施設の運営管理に努める。

また、トンボ類の生体展示や水生昆虫の充実を図るほか、特別展の開催やパネル等を活用し解説に工夫を凝らすなど、入館者の拡大に努める。このほか、自然体験講座としての「昆虫採集と標本作り」を実施するなど、自然保護思想の普及啓発活動の場として有効活用する

Ⅳ 環境省「国指定伊豆沼鳥獣保護区管理センター」管理事業

東北地方環境事務所とも連携しながら施設の適正管理に努めるとともに、自然保護・環境保全活動の場として、有効活用する。また、ガンカモ類など鳥類の標識調査や学術研究等に使用する。このほか、鳥インフルエンザの検査対応にも積極的に国を支援する。

Ⅴ ラムサール記念公園管理事業

県サンクチュアリセンターに隣接する栗原市のラムサール記念公園については、法面の除草作業や芝の手入れを毎月（5～9月）実施し、適切な維持管理を行う。また、財団が実施する自然体験講座など環境教育の場として、有効活用する。

Ⅵ 伊豆沼・内沼の自然写真展事業

「伊豆沼・内沼の自然」及び「伊豆沼・内沼にかかわる人々」を題材とする写真展を登米市、栗原市及び財団の3者で構成する実行委員会において開催する。

この写真展は平成28年度で26回目を迎えることとなり、県サンクチュアリセンターのほか、登米市役所や栗原市役所などで展示を行い、広く伊豆沼・内沼の環境保全の重要性を啓発する。

VII 調査研究・普及啓発事業

伊豆沼・内沼の自然環境の保全管理のため、各種団体と連携を図り、調査研究並びに保全活動を行い、研究成果については、研究報告や研究集会を通して全国に発信する。

また、リニューアルしたサンクチュアリセンターを活用した講話や技術指導を行うほか、出前講座を開催し自然保護の普及啓発活動を行うとともに、みやぎラムサールトラリアングル関連事業などにも積極的に参画する。

さらに、家族を対象とする伊豆沼・内沼自然体験講座を年10回開催するほか、オオクチバスの駆除や植栽活動など、ボランティアとともに行う保全活動を推進する。

VIII 伊豆沼・内沼自然再生事業

昭和55年の多様な生物が生息する生態系を有していたころの伊豆沼・内沼への再生を目指すため、平成22年度に策定された伊豆沼・内沼自然再生事業実施計画に基づき、水生植物保全整備及び湖岸植生保全整備を行う。水生植物保全整備では、沼内で減少している沈水植物の復元に向け、①埋土種子発芽試験、②系統保存、③移植及び食害防止柵設置、④沼内生育状況調査を行う。湖岸植生保全整備では、①ハス群落及びヨシ群落の刈り取り、②湖岸浸食防止柵の設置を行う。

IX 伊豆沼・内沼よみがえれ在来生物プロジェクト事業

オオクチバス等外来種の侵入などによって減少した在来生物を回復させるため、在来生物生息域の回復と外来種対策を行う。在来生物増加促進対策では、過年度からの継続業務として①在来魚産卵魚礁の設置、②屋外適地での在来生物の系統保存と増殖、③在来魚生息状況・在来植物生育状況調査、④市民参加型在来生物の増殖技術の検討を行う。外来生物の駆除では、①電気ショックカーポートによる外来生物の駆除、②外来生物による食害等の防止対策を行う。また、新たに外来水生植物の除去や二枚貝類の増殖・移植事業に着手し在来生物の復元の促進を図る。

X 環境研究総合推進費事業「オオクチバス等に対する化学的防除技術の開発」

伊豆沼・内沼の生態系に大きな影響を及ぼしているオオクチバスやブルーギルなどの外来魚の防除のため、性フェロモンなどの化学物質を用いた、新しい防除技術の開発を行う。このため、本事業では①オオクチバス等のフェロモン物質の探索、②フェロモントラップの開発、③湖沼におけるフェロモントラップの誘引効果のシミュレーションを行う。

X I 環境研究総合推進費事業「ロボットによるモニタリング技術の開発」(新規事業)

湿地の保全と再生を推進するため、フィールド調査と最新のロボット技術をシームレスに繋ぐことを目標とし、東京大や北海道大などの研究機関との共同研究により、ドローンやフィールドサーバー、ロボットボート等を用いて湿地の生態系(水鳥や植物、昆虫等)を対象とした低コストかつ効率的な監視・管理技術の開発と、その活用のためのマニュアルを作成する。

X II 国指定伊豆沼鳥獣保護区外来魚駆除事業

伊豆沼・内沼の生態系に大きな影響を及ぼしているオオクチバスやブルーギルなどの外来魚を駆除するため、外来魚の繁殖期である5月から6月にかけて、人工産卵床や三角網を用いた繁殖抑制による駆除活動を実施する。

X III 国指定伊豆沼鳥獣保護区外来魚防除事業

10年以上に亘る外来魚駆除活動により、伊豆沼に生息するオオクチバスやブルーギル等の外来魚はピーク時の10分の1以下に減少した。これらの外来魚を低密度状態に維持管理し、生態系の回復を促進するため、低密度条件下でも防除効果が期待できる財団が開発した罠付きアイ籠等の駆除技術を中心とした防除作業を実施し、その成果を基に、伊豆沼・内沼の外来魚をより低密度に維持管理するための方策を検討する。

X IV 国指定伊豆沼鳥獣保護区ハス刈取り事業

伊豆沼・内沼の85%以上を覆っているハス群落は、夏の重要な観光資源である一方、生態系への影響が顕在化している。その一つは、マガン等のねぐらとなる開放水面の縮小である。本事業では、国指定伊豆沼鳥獣保護区におけるマガンやオオハクチヨウの生息環境を保全するため、ハス群落の一部を刈払い、マガン等のねぐらの確保を図る。

X V 伊豆沼・内沼トンボ保全プロジェクト事業

伊豆沼・内沼は、絶滅危惧種で全国的にも珍しいオオセスジイトトンボが豊富に生息する水環境であったが、生息環境の悪化で本種は激減し、絶滅が危惧されている。そこで、その生態調査および保全活動を行い、その取り組みを普及啓発する。オオセスジイトトンボの分布、行動および生息環境等の生態を明らかにするとともに、その生息に重要であると考えられるマコモを沼に移植する。また、子どもを対象とした体験イベント「ラムサール条約湿地のトンボを守ろう！」を開催し、子ども達が環境保全活動を実体験できる場を提供する。

X VI そ の 他

サンクチュアリセンター諸活動の普及発展に寄与することを目的に設立した宮城県伊豆沼・内沼サンクチュアリ友の会の育成強化を行う。また、伊豆沼・内沼絵画展実行委員会が実施する「伊豆沼・内沼絵画展」を支援する。